

## あの事故対応、あれでよかったのか？

OWCC 中川和道 20191016

2008年頃の正月に、OWCCの仲間3人と甲斐駒ヶ岳黒戸尾根を登行中、他パーティーの事故に遭遇した。現場で救助責任者をまかされ、警察とやりとりして警察ヘリに無事救助していただいた。あの進め方で本当に良かったのかという思いはどうしても残っている。再び考え直してみた。

黒戸尾根には真新しい木道が整備されていてびっくりした。皇族のなかでも位の高い山好きの方が夏にここを登った効果だと仲間が言う。その道を不安そうなしぐさで下って来られる男性がいた。我々は声をかけられた。今となっては場所も定かではないのだが、刃渡りという岩場(海拔1900m)の近くだったかと思う。「黒戸尾根を下山中、同行者が木道でアイゼンを引っかけて谷底に100mくらい転落。危険な谷を必死で下って確認したら頭が割れていた。私は怖くなり、登山道まで登り直して他のパーティーを待機していたところだ。携帯電話は登山口駐車場の自家用車においてきたので、電話がない。あなた方に救助を依頼したい」とのことだ。携帯を貸して110番通報してもらい、中川が仲介して救助作業を進行した。

電話は地元の警察にかかり、山のことは知らない方がご担当になった。救助にヘリを回しますと言われ、ピックアップまで中川たちも現場にとどまって下さいという。1時間ほどしてヘリがやってきて、パイロットがどの谷かと尋ねるしぐさだ。同行者の方がこの谷だと上から下へと両手で指し示す。パイロットは了解の様子を我々に伝え、谷を覗きに下降していく。ヘリがホバリングしている。確認しているのだろう。同行者にあの高さかと聞くとあれより低くはないだろうとの答えだ。ヘリが上空に舞い上がり、警察から電話。警察と話した同行者はわなわなと震えて中川の目をじっと覗き込み、泣きそうになって絶句した。おかしい、中川は電話を替わった。何と、「遺体の回収と尾根からの同行者ピックアップを一度にやるにはヘリの燃料が足りない。遺体と同行者を同時に上げたい。同行者に谷底に降りるように指示してもらえないか」というのである。中川は即座に「現場を預かる者として同行者の危険が大きすぎると判断します。今の状態の同行者の方があの急な谷を下ると、死ぬ危険が大きい。もうひとつ死体を増やすご指示ですか？ご指示の撤回をお願いします」。警察は指示を撤回して下さい。警察官には現場が見えない。無理もないのだ。

ヘリはいったん基地へと帰り、薄暗くなってから再度飛んできた。谷底でかなり長い時間ホバリング。回収作業だ。やがてヘリは稜線へと上昇してきた。同行者にザックを背負ってもらい、スリングを腰にまきつけ、準備完了。さあ、吊上げだ。と思ったら、パイロットはザックをはずせという。ええー！じゃあ仕方ない。ザックをはずして岩陰にデポし、同行者に場所を覚えてもらった。腰のスリングに安全環つきカラビナをセットし、これを吊り上げるとパイロットに合図。ヘリの下方爆風に決してひるまない我々の手際を確認し、パイロットはフックを下ろしてきた。カラビナをセットしてロックし落ちることはないと同行者に告げた。吊上げだ。ひきつった顔を無理にゆるませ、上がっていく同行者とパイロットに笑いかけ、投げキスをする…。静寂がもどった稜線で我々はへなへなと座り込んだ。夕暮れから間もなく夜。ああ、これで我々の冬山行は強制終了だ。

あの事故対応で本当によかったのか？(1)ヘリ給油が遅れて夕刻の時間切れがまずいので警察は当初あの指示をした。あそこで強引に頼む手もあったのか？(2)ザックも一緒に吊ってくれと言いつけなかった。(3)電波があまりにも切れ切れだった。無線機がよかったのか？思うことはいっぱいだ。

精一杯やったから許してくれただけではすまない事態は、今回は避けられた。でも・・・、と中川は思うのだ。もっといい対応があったのではなかったか？と・・・。

あの素晴らしいボディランゲージとゆるぎない指示。ゴーグルをかけているくせに迫ってくるあの絶対的な達意。事故を起こすまいと中川に思わせる確かな信頼感が、そこにはあった。あの救助隊員は、中川にとって永遠のヒーローだ。あの方にもう一度、会ってみたい・・・。